



Title	寛仁二年頼通大饗屏風和歌とその場面
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1991, 9, p. 29-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67301
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

寛仁二年頼通大饗屏風和歌とその場面

伊井 春樹

一 頼通の大饗屏風

寛仁元年（一〇一七）三月十六日に道長は摂政を辞し、三月四日の除目で内大臣となっていた頼通がその後を継いだ。『栄花物語』（巻十二たまのむらぎく）によると（一）、

同じ月の十七日に、大殿（道長）、摂政を内大臣殿（頼通）に譲りきこえさせ給ふ。内の大い殿、御年今年二十六にぞをはしましける。「いと若うおはしますに」と恐ろしくおぼしながら、「我がおはしませば、何事もおのづから」とおぼしめすなるべし。

と、道長は自分の権力のあるうちにまだ若い頼通を摂政の地位に就け、一家の繁栄を確固たるものにする狙いがあったことによる。右の「十七日」とするのは十六日が正しく、『日本紀略』の同日条に「摂政叙・従一位」。是日也。讓・摂政於内大臣・有「宣命」とあり、『御堂関白記』にも、「辞摂政献表、被止有勅舍、左近中〔將〕兼綱来、左衛門督（教通）拜之如常、

即以内大臣為摂政下詔、太皇太后宮大夫（公任）行之云々」とある。道長の辞意に対し、後一条天皇から遺留があり、その意向の固さを知るとすぐさま頼通へ摂政の詔勅が下るといふ、手はずの整えられた次第となる。

このようなことがあって、翌寛仁二年の摂政頼通家の大饗は、正月二十三日にはなやかに催された。その様相を知るため諸記録をたどると、まず『日本紀略』には「摂政内大臣家大饗。右大臣公季為「尊者」とし、『御堂関白記』には二日前の二十一日条に、

摂政大饗料屏風詩并和哥等被持来、被来「弓」上達智部相定、按察大納言（齊信）・四条大納言（公任）各詩五首、是皆上、仍入、広業・為政・義忠・為時法師等相定各兩三人、不心吉有数、和哥輔親・輔尹・江式部（和泉式部）等各相定人之、多無心吉、我少々入之、大納言一首随有、と、大饗の屏風のこと詳細に記される。道長邸に大饗料屏風の詩歌が持ち込まれ、上達部と撰定し、漢詩については齊信・

公任の五首はすぐれているためすべて採用、広業・為政・義忠・為時は各二、三首の選人という。これ以外に詩作した者もいたであろう、道長が「不心吉」と判断する作品も多数寄せられていたらしい。和歌については、輔親・輔尹・和泉式部などの詠が採られたものの、できればのよくないのが多く、道長自身がその場で詠んだのか、数首を加えることにした。そのほか、公任の歌一首は撰定外というであろう、屏風として加えられることになったようである。

屏風歌の具体的な計画については明らかでないが、二十三日の大宴に向けて早くから準備が進められ、多くの人々に詩歌の提出が求められ、この日集められた作品の撰定が道長邸で催されたというであろう。公任に関しては、漢詩人の評価とともに、別枠として和歌も求められるという特別待遇であったと知られる。『権記』の二十一日の条によると、

按察大納言 四条大納言、於大殿、撰政殿大宴料御屏風詩并歌等撰定、令侍從中納言書給、〔割注〕詩作者按察四条面垂相、式部大輔広業、内蔵権頭為政、大内記義忠、歌作者大殿、四条大納言、輔親、尹、式部女等也」

と、同じ内容ながら、またすこし異なる情報を伝えてくれる。この屏風和歌撰定作業は実質的に資信・公任が中心になって進めたようで、二人は道長邸に赴き、集められた詩歌から屏風に押す作品を抜き出し、書写は行成に命じられたという。詩の作者は資信・公任、広業・為政・義忠、歌は道長・公任・輔親・

輔尹・和泉式部と、『御堂関白記』の内容とほぼ重なる。ただ右の記述からは、道長が飛び入りであったこととか、公任は輔親などと同列ではなく、別に求められて歌を詠んだことなどは知られない。この折の屏風詩歌についてさらに詳細に伝えてくれるのは『小右記』で、次に二十一日の条を引用しておく。

大外記文義垂尊云々、今日政始、撰政新調大宴料四尺倭絵屏風十二帖被持参也、画工總部佐親助、包〔色〕紙形有詩并和哥、今日各献之、詩者大納言資信・公任・式部大輔広業・内蔵権頭為政〔慶滋〕・大内記義忠・為時法師作、和哥者斎〔察〕主輔親・前大和守輔尹・左馬頭保昌妻式部誦之、大納言公任卿遲参不出詩、太相府頻以被催、頗有興委之氣、怒立退、以右中弁定頼令書出、卿相数多会令〔合力〕、侍從中納言行成可書、拾遺云、不可書出明後日大卿云々、面納言詩不可評定、曰〔自力〕余可撰、被相定問、下臈上達部各々分散、〔齊力〕主和哥明日可定云々、非備者上臈公卿〔下〕下〔官〕命候〔作力〕〔屏〕風詩如何、不異凡人、就中公任卿故官候、書〔周〕忌内有此與如何、

文義の報告した内容によると、撰政頼通の大宴料としての四尺屏風十二帖が新調され、道長邸へなのである。すべて運び込まれて人々に披露されたようである。織部親助による絵、それに詩と和歌とを書す色紙形の押された屏風、この製作だけでもかなりの日数を要したに違いない。「今日各献之」と、この日が締切で、次々と道長邸に集められたが、公任は遅参して詩

を提出することができなかったという。ただ、後に「両納言詩不可評定」と二人の詩は無審査と記しているため、撰定の時刻に間に合わず示されなかったというだけで、遅ればせながら公任はその場に持って来たはずである。道長はこの屏風詩歌にいたって興味を示したようで、『御堂関白記』によると感心しない作品が多かったという理由のようだが、自らも歌を詠んで加えることにした。

撰定が終わると定頼が書き出し、それを行成が色紙形に染筆していったのだが、彼の言によると、明後日の大饗までにはとても書写するのが困難だという。それは書くべき詩歌の多さもさることながら、「和歌明日可定」と、和歌の撰定作業が遅々として進まず、翌日に延期されたという時間的な余裕の無さも愁えてのことばであろう。二十三日の当日、『御堂関白記』によると、「新屏風從侍中納言許書持来」とするので、行成宅に持ち出され、そこで作業は続行していたと思われる。それに続けて実資は、儒者でもない上臈の公卿が、命によって屏風詩を作ったことに疑念を表し、とりわけ公任は姉の太皇太后宮還子を前年の六月一日に失い、その一周忌も終わっていないにもかかわらず、このような祝の詩を詠作するのはいかがであろうかと、阿諛にも頼した態度を非難する。

二十三日は終日雪、摂政頼通邸には道長をはじめとして尊者公季ほか多数の上達部が参集し、大饗の宴がはなやかに催される運びとなる。その席で人々の目を奪ったのは、大饗料にと新

調された十二帖もの四尺屏風で、絵と詩歌のできればに感嘆しながら眺めたことであろう。『栄花物語』（巻十三、ゆふしで）にもこの折の屏風のことが記されているので、次に抜き出しておく。

この二十日余りのほどは、摂政殿の大饗あべければ、その御屏風どもせさせ給へるに、さべき人々に皆歌くばりたまはするに、大饗、「我も詠まん」と仰せられて、世のいそぎに御暇のおはしまさねど、ともすれば端ちにうちながめてうめかせ給ふほど、さまざまめでたく、人の御身の幸ひ、御心さまも常のことながら、かばかりいそがしき御心におぼし忘れさせ給はぬ御心のほども、聞えせん方なくおはします。すべて和歌八十首ぞ出できたりつれど、入りたる限りをだに尽し書かず。

「すべて人々に皆歌くばり賜はするに」とするように、あらかじめ屏風絵に関する資料(2)が配られ、それにもとづいて詩や和歌が詠まれたはずである。集ったのは八十首、その中から屏風に押す歌を撰定するのだが、漢詩と同じく一人五首を詠んだとするとおおよそこれは十六人分ということになる。後に示す資料によると、同じ場面に漢詩と和歌がそれぞれ詠まれているので、色紙形一枚には和漢が一首ずつ並べられて書写されたのであろうか。屏風には、多く二扇で一枚の色紙形が押されるよううで、この場合六曲とすると、一帖で三枚、十二帖存在したため三十六首の和歌なり漢詩が必用になってくる。一人五首とす

ると、五場面の歌を他の者と重複しながら詠んでいるわけだが、撰定の場に道長も加わっていたのであろう、できればの気に入らない歌も多いとし、除外して不足となった箇所自らの詠を用いることにしたのである。漢詩では奇信と公任が五首ずつ、広業以下の四人が三首ずつなので、これだけですでに二十二首を占めることになり、残りの十余首を実資が疑念を表明した上臈の公卿たちが分担して詠作したのであろう。採用された数値から判断しても、屏風は十二帖だけに、和歌と漢詩との場面が別々であり、それぞれに色紙形を押したとは考えられず、やはりすでに想定したように、一紙に両首が書写されていたに違いない(3)。

二 屏風和歌と作者たち

頼通大業の屏風歌は、十数人にその詠作を求め、二十一日にはおよそ八十首も集められたようで、奇信・公任などを中心とした殿上人たちは撰定作業を進め、不採用のため空白となった場面には、道長も加わって苦吟したという。屏風に染筆された歌の一部が、先ほど引用した『栄花物語』の場面に続けて次のように記される。(ここでは仮に歌に通し番号を付した)

やまとのかみすけただの朝臣、卯杖を、

1 常盤山おひつらなれる玉椿君がさかく杖にとぞきる

大業したる所に、殿の御前、

2 君がりとやりつる使ひ来にけらし野辺の雉子はとりやしつらん

春日の使ひ立つ所、和泉、

3 春日野に年も経ぬべし神のます三笠の山に来たりと思へば

山里に水ある所に、まら人來たり、祭主輔親、

4 この宿に我をとめなん沢水に深き心のすみわたるべく五月節、輔尹、

5 競ぶべき草も富満の駒もみな美豆の御牧にひけるなりけり

九月九日、殿の御前、

6 かくのみもきくをぞ人はしのびける籬に籠めて千代を匂へば

四条の大納言別に二首奉らせ給へり。桜の花見る女車ある所、

7 春の花秋の紅葉もいろいろに桜のみこそひと時は見れまた紅葉ある山里に男來たり、

8 山里の紅葉見るとや思ふらん散り果ててこそ訪ふべかりけれ

いと多かれど尽くし書かず。大業は正月十三日なり。ありさまいふもをろかにめでたし。

道長は日記に公任の歌は一首としていたが、「別に二首奉ら

せ給へり」として示されるのは、ここから片方が屏風歌として採用されたであろうか。『公任集』には、

寛仁二年正月、入道前太政大臣大饗しはべりけるに、

屏風の絵に、山里に紅葉みる人きたる所

8 山里の紅葉見にとや思ふらむ散りはててこそとふべかりけれ (五五〇)

と、紅葉の歌だけが収められるので、あるいはこの一首が色紙形に染筆されたのかもしれない。その歌数はともかく、『栄花物語』の記述でも、公任は別に漢詩を詠じているためか、和歌はとくに求められての提出であったことが明らかである。

八首の内容は、春五首、夏一首、秋二首となり、偏りがあって冬は見あたらないものの、ほぼ季節を追って並べられているのにより、すでに明らかにされているように、年中行事を中心とした月次屏風だったと想定される。勅撰集の四季部の配分に従うと、新調された四尺の十二帖の屏風は春秋四帖、夏冬二帖といったところで、はなやかなできばえとして人々の前に披露されたはずである。この折の屏風歌の現存資料を、もうすこし他の歌集などから拾い出して集成し、新出の歌には先ほどからの通し番号を、重複した歌には前と同じ番号を付す。

〔後拾遺集卷一春上〕

入道前太政大臣大饗しはべりける屏風に臨時客のかたかきたるところをよめる 藤原輔尹朝臣

9 むらさきもあけもどりもうれしきはるのはじめにきた

るなりけり (一六〇)

同じ屏風に大饗のかたかきたるところをよみはべりける

2 きみませどやりつるつかひきにけらしのべのききすはとりやしつらん (一七七)

入道前太政大臣

〔同卷五秋下〕

寛仁二年正月、入道前太政大臣大饗しはべりける屏風に山ざともみちみるひときたるところをよみはべりける 前大納言公任

8 山ざともみちみにとやおもふらんちりはててこそとふべかりけれ (三五九)

9 の詞書に見える「入道前太政大臣」について、『後拾遺和歌集』（講談社学術文庫）では道長とし、「いつの大饗かは明らかでない」とするが、確かに次の歌の詠者「入道前太政大臣」は道長であるし、頼通は「宇治前太政大臣」とあって区別する態度である。ただ、この道長の歌は『栄花物語』にも収められた頼通大饗の屏風歌であり、三五九番の公任詠の「入道前太政大臣」も寛仁二年正月と明示するように頼通を意味する。『後拾遺集』でも、「長保五年五月十五日、入道前太政大臣家歌台に云々」（卷三・夏・一九七）と、この場合は道長を指すなど、同じ呼称でも詞書では頼通と混用されていたようである。

〔輔尹集〕

入道前太政大臣たいかう(傍記「いへ敷」)の屏風に
りんじ客かたかきたる所に

9むらさきもあけもみどりもうれしきは春のはじめにきたる
なりけり(四七)

10とやかへるましろのたかをひきすへてきみがみかり(以下
欠、四八)

〔和泉式部集〕

春歌

3春日野に千代も経ぬべし神のます三笠の山に來たりと思へ
ば(三二二)

『和泉式部集』では他の歌とともに編纂して「春歌」にまと
められているため、この歌が大饗屏風歌の詠とは分らないが、
『栄花物語』によって成立の背景を知ることができる。

〔夫木和歌抄〕

摂政家御屏風、大臣大饗会所楽舞有所拝礼

祭主輔親

11よろづよの舞の袖ふるやどにこそあるじたづねてもろ人も
くれ(卷三十六、雑十八、一六八二)

『夫木和歌抄』には、ほかに輔親の詠として、

摂政家御屏風 祭主輔親

①あまたとしとやふむ鷹はましろにてかたの草の霜にこそ
ふれ(卷二十七、雑九、二二七八)

殿下御屏風 祭主輔親

②かたがたにいどめる駒のあしなみをさつきならではいつか
くらべん(同、二二九九〇)

摂政家御屏風、卯づゑ 祭主輔親

③君がためときは山の玉つばきいはひてとれるけふの卯杖
ぞ(卷一、春一、一七三)

と三首見いだす。「摂政家御屏風」とするだけなので、それが
大饗の折なのかどうか不明だが、①は10の輔尹詠に近似し、②
は『栄花物語』所収5の「五月節」に、③は1の「卯杖」と一
致するなど、同じ折の屏風歌と考えられなくもない。

〔後葉和歌集〕

入道前太政大臣大饗し侍りける屏風に、仏名かきたり
ける所をよめる 藤原輔尹朝臣

12人しれずつくれる罪を過ぎて行く年とともにもつくしてし
がな(卷六、冬、二二七)

入道前太政大臣大饗し侍りける屏風に、野行幸かきた
るところに 祭主輔親

13御狩する野べの冬草かぜになびきはるけくみゆるしめの内
かな(卷十六、雑一、四四二)

すけまさ

10とやかへるましろのたかをひきすゑて君が御狩にあはせつ
るかな(同、四四二)

〔万代和歌集〕

法成寺入道前摂政家屏風に、賀茂祭を 藤原輔尹朝臣

15 神やつこころやなにぞもちはやぶるかものまつりにあふひ
なりけり(巻三、夏、五二七)

法成寺入道前撰政家屏風の歌 藤原輔尹朝臣

16 たなばたのてだまもゆらにおりかけしくものころもはこよ
ひかもたつ(巻三、夏、八二二)

法成寺入道前撰政家屏風に、石清水臨時祭を

藤原輔尹朝臣

17 いろかへぬやまあるのころもぬぎたれてよろづよまでにつ
かふべきかな(巻七、神祇、一五七五)

法成寺入道前撰政家屏風に 藤原輔尹朝臣

18 神のますみやまさかきにゆふかけてよはにぞいのる君がみ
よをば(巻七、神祇、一六二二)

屏風の色紙形は行成が筆を染めたことが明らかだが、古筆資
料にはその作品と思われる行成筆とか行経筆とする和漢を書写
した断簡が伝来する。『都地久遠』『書道全集』(平凡社)『古
筆』に収められた一葉は、次のような内容である。

輔尹

12 ひとしれすつもれるつみをすきてゆくとしと、もにもつ
くしてしかな

式部不献

除夜 菅元正筆

義忠

▲元正方節近占隣事々宮々幾許人莫遺年光今

初めの「ひとしれず云々」は、すでに示した12『後葉集』の
輔尹詠と一致しており、これによっても大嘗屏風歌の断簡であ
ったと知られる。輔尹は「仏名かきたりける所」を詠んでおり、
続いて「式部不献」とあるのは、式部大輔広業が同じ場面の漢
詩を割り当てられながら事情によって提出しなかったというの
であろう。これまで読み解いてきたように、広業は漢詩の作者
としてその名が記されており、採用は三首ともされるので、当
日欠席してまったく献上しなかったわけではない。これとつれ
の断簡は行成息の行経筆として、『翰墨城』『日本古筆名彙集』
『書道全集』(平凡社)『かな古筆てかがみ』等に収められる。

為時

B 園平聖範太照然別置集儀万歳伝舞袖巾羅綺照奔車怒馬道

□□

□知公子查吾上疑是神仙降自大暗雲帯風河岸遠莫辞停去

醉代□

輔尹

17 ふりはへぬやまあるのころもぬぎたれてよろづつ(ミセケチ)
よまてにつかふへきかな

式部不献

この断簡によると為時が漢詩、輔尹が一首の歌を詠み、ここでも広業は「不献」と提出しなかったことが知られる。道長は日記に漢詩も和歌も「不心吉有数」「多無心吉」と記していたが、あるいは彼は人々の持参した作品に次々と目を通し、大饗の屏風歌としてはあまりよくないと判断すると撰定の対象からはずさせたのかもしれない。この切には屏風和歌題が見あたらないため、為時・輔尹・広業はすべて同じ場面を担当したようである。漢詩と和歌との分別もしないまま一まとめに転写し、それを撰定の資料としたのであろう。しかもミセケチがあるのを見ると浄書ではなく草稿的なもので、屏風の場面と詠者の順番にもたらされた作品をまず集成し、そこから色紙形に押す詩なり歌を選び出したに違いない。ただ、この断簡からだけでは、屏風の詠むべき場面をあらかじめ詠者に割り当てていたのか、三十八場面と想定したすべてに各人漢詩なり和歌を作ったのか、などといったことは明らかでない。すくなくとも、これまでの資料によって知られるように、『小右記』等に記された詠者の作品以外は見あたらないところを見ると、そこに登場する人物が大饗屏風の参加者すべてであったと思われる。

さらにもう一葉、後藤氏の紹介された『定本書道全集』（河出書房）の「詩歌切」は、

為時

C□笛声清人意案其神欽亨暗応知斎場有一俳優士醉舞跳梁

不道□

輔尹

18□みのますみやまさかきにゆふかけてよはにそいのるき
みかみよをは

輔親 式部並不献

とあり、いずれもつれであると知られる。このほか、『書道全集』（平凡社）の掲出した伝行経筆の断簡には、

輔親

19□□□□はことしをくらすへたてにてあすはちと世
□□□□はしめそ

輔尹

20□□□□はるはたちくるわかやとにこなたかなた□
□□□□そする

とあり、これも同じ大饗料に詠まれた二人の新出歌と言及する（田中塊堂）。ただ、20は『輔尹集』の、

ある所に前裁ほるに

21あきさらにきみまつみよとのべにいでゝめにたつはなをを
りてこそくれ（五〇）

冬はゆきはるはたちきるわがやとにこなたかなたのいそぎ
をぞする（五一）

とある後者の歌のようで、配列からすると題は「前栽掘る」となるのであろうか。これが大饗料屏風歌となると、輔親は同題で二首詠んだことになり、断簡の歌19も同じ屏風の場面となるはずだが、内容からすると両首ともに新年を迎える歌のようにも思える。あるいは義忠の詩につらなる「除夜」の題であり、前者が「前栽掘る」とする別の題なのだが、家集編纂の折同じ資料に依拠したため誤ってまとめられてしまったとも考えられる。『和漢兼作集』（巻六、秋上）に、大饗屏風詩と想定される為政の「掘前栽 野辺有衣冠人」があり、「前栽を掘る」の場面が存在していたと知られるのによっても、これは確かめられるようである。

ただ、初めの三葉と後の一葉とは、筆跡は酷似するものの、明らかに書写の形式が異なる。前者は和歌一首一行で書写するのに対し、後者は二行書きとなり、しかも田中塊堂氏の解説によると、天地は二八センチと二三・五センチとあって料紙の大きさにも違いがある。下書から屏風用の色紙にすぐさま浄書したのではなく、定頼が書き出したように、その間にもう一段階の整理があったとも考えられる。

三 大饗屏風の場面

これまでのところ頼通大饗屏風の作品は、和歌が二〇首余、

漢詩は一二首が比定されており(4)、さらに関連しそうな輔親の歌を三首加えるなどすると、月次とされる屏風に描かれた場面もある程度までは復元することができくる。すでに指摘されたりまとめられてはいるが、新たな資料も含めて屏風の場面を季節順に配列して集成し、歌の番号を示すとともに、すこし異なる描写は参考として本文も付記した。

春		夏	
○卯杖(栄花)	正月(1・3)	○曲水宴(義忠)	同
*卯杖(義忠)		○石清水臨時客	三月(B・C・14・17・18)
○大饗したる所(栄花)	同(2)	○山里に水ある所にまら人來たり(栄花)	四月カ(4)
*大饗のかたかきたるところ(後拾遺)		○卯花囲牆(義忠)	四月カ
*大臣大饗会所樂舞有所拜礼(夫木)	同(11)	○賀茂祭(万代)	四月(15)
○子日(義忠)	同	○行客聞郭公(義忠・為政)	五月カ
○臨時客のかたかきたるところ(後拾遺)	同(9)		
○春日野使ひたつ所(栄花)	二月(3)		
○桜の花見る女車ある所(栄花)	三月(7)		
○三月三日(為政)	同		

秋		五月(5②)
○五月節(栄花)		
○七夕(万代)		七月(16)
*乞巧奠(広葉)	同	
○駒迎女車来過(奇信)	八月	
○九月九日(栄花)	九月(6)	
○紅葉ある山里に男来たり(栄花)	同(8)	
*山里に紅葉みる人きたる所(公任集)		
○前栽掘る(輔尹集)	九月(カ)(21)	
*掘前栽 野辺有衣冠人(為政)		
○野行幸かきたるところ(後集)	十一月(10・13①)	
○仏名かきたりける所(後集)	同(12)	
○除夜	同(A・19・20)	
冬		

右のうち10は、『輔尹集』には臨時客の詠9の後に続けて置かれているが、『後集』では輔尹とともに「野行幸」の場面に配され、内容からもその方がふさわしいであろう。このようにして並べてみると、二十一場面を数え、初めに推定した屏風十一帖の全体構成からすると、およそ三分の二近くが復元できることになる。家永三郎氏の集成された(5)当時の裳着とか大饗・賀宴などの席に置かれた屏風は、正月から月日を追っての四季図がもっぱら中心だったようだが、頼通の大饗屏風もその範疇にあるといえよう。

『栄花物語』に記された、公任の別梓一首を除く残り六首は、

ほぼ季節の推移に従って示されているので、屏風の絵も四季の展開のもとに描かれ、そのように当日も並べられたはずである。ただ、春の二首は、初めに「卯杖」が、次に正月二日の「大饗」が置かれるのは、年中行事(6)の次第からすると順序が逆のように思われるが、あるいはこれは誤りがあるのかもしれない。「卯杖」は、『延喜式』によると曾波木(そばき)・比々良木(ひひらぎ)・桃・柏・椿等の木で作り、長さは五尺三寸に切りそろえ、大学寮や大舍人寮・諸衛府から天皇とか春宮に献上する儀式という。屏風絵の「卯杖」の例としては、『元輔集』に実頼七十賀(安和二年十二月九日)に詠まれた「位山みねにつきぬる杖みればただゆくすゑのさかのためには」(II一五八)(7)を見いだす(『拾遺集』巻五・賀・二八一)では能宣の歌とする)。位山は飛騨国の歌枕で、笏の材料となる櫟の特産地とされるが(8)、ここではそれで卯杖を作ったことを意味するのであろうか。1の輔尹の歌は、常盤山にすらなり生えた玉椿を、君の繁栄を祈って杖として切るとし、天皇の御代とともに頼通をもことごとく内容といえよう。参考として示した、『夫木和歌抄』の③は、「ときはの山」「玉つばき」の共通することばによってもやはり同じ折の作品とみなしてよいようで、屏風には常盤山を背景に、斬り出された玉椿の卯杖が献上される場面などが描かれていたとも考えられる。

2の「大饗」は、毎年正月二日に群臣が後宮(皇后・中宮・皇太后)と春宮に拝賀して饗宴と禄を賜わる二宮大饗と、同じ

日に摂政関白大臣家において親王・公卿を招いて饗宴を催す摂関大臣大饗との二つがある。このほか、正式の招待客ではなく集った人々に対する饗応を臨時客と称し、大饗をやや簡略化した内容で進められるものもあった。また、大饗には『江次第鈔』（続々類從）によると「初任大饗可於庶行之、毎年大饗於母屋行之、有鷹飼渡事等」と、大臣新任による大饗は廂の間で、例年の大饗は母屋で催されたという。「鷹飼渡事」は、尊者や親王、殿上人の着座の後、鷹飼が臂に鷹、肩に雉を置き、犬飼を連れて入場することで、その後包丁人が雉を取って柴枝に挿し、その場で料理して雉羹を饗応することになる。道長の歌は、尊者を迎える請客使が戻って来たのにより、主賓の訪れと表現し、さらに鷹飼も野辺から雉子を捕ってきたであろうと、大饗の準備がすべて整ったことを意味する。そのような大饗の図が描かれていたであろうが、それとともに頼通は前年の三月に権大納言から内大臣に昇進し、今年は新任の大饗だけに、それを祝してのあいさつの歌でもあったに違いない。この場面は、頼通は摂政となり、道長から長者印を譲られた、まさに晴の大饗となったと当日を想定しての絵画化でもあったはずである。『江次第鈔』によると、「鷹飼渡」に続いて雅楽寮の楽人が参入し、舞楽が催されたところがあるが、これを歌にしたのが11であろう。

つづいて9のように臨時客も描かれていたらしく、輔尹の歌によると、「紫」（三位）「朱」（五位）「緑」（六位）の多くの殿上人が春の訪れの喜びを祝って参集しているという。大

饗に招かれなかった人々が、それぞれの祝意を示そうと果まり、臨時客が催されることになったようで、すこし後になる長元六年（一〇三三）十一月の鷹司殿餞子七十賀での、同じく臨時客の屏風絵に、赤染衛門が、

紫の袖をつらねてきたるかな春くることはこれぞうれしき

（『栄花物語』巻三十二、歌合、『赤染衛門集』Ⅱ）

と詠んだのと酷似する図様だったと思われる。これも、頼通のめでたさを祝うの歌となっており、そのようなにぎわった邸内などの様子が描かれていたのであろう。

3は「春日の使ひ」、7は「桜の花見る女車」、さらに「三月三日」「曲水宴」「石清水臨時祭」と続き、ここまでが春の部の屏風絵となる。寛弘二年（一〇〇五）二月五日に、当時十三歳だった頼通が春日の使いとして雪の降る日に出立し、その身を案じて道長が公任や花山院と歌を贈答したことが『栄花物語』や『公任集』、『御堂関白記』に収められるが、その広く知られた話を直接念頭にしないまでも、春日神社は藤原氏の氏神だけに、その繁栄のほどを慶賀する思いが込められていたはずである。次の歌は、車の簾の下から衣のきらびやかな裾などが出されて一目でそれと分る女車が、山里に咲く桜のもとに立ち止まっている図を詠んだのであろう。「五月、郭公鳴く山道に女車行く」（『忠見集』一二〇）といった屏風絵の例もあるように、女車が添えられることによって、桜や郭公はさらに優美さを増すことになる。

『万代和歌集』と古筆断簡の輔尹詠17「やまのころも」は、『新古今集』（巻十八、雑下）の、

臨時祭の舞人にて、もろともに侍りけるを、ともに四位してのち、祭日つかはしける 実方朝臣

衣での山の水にかけみえし猶そのかみの春ぞこひしき（二七九七）

返し

道信朝臣

いにしへの山の衣なかりせばわすらるる身となりやしなまし（二七九八）

とするのと同じであろう。「山の衣」は、「山藍」で摺った衣を示すとともに、「山井」によつて岩清水を背景としたことばのようで、輔尹もその臨時祭（三月午の日）を詠んだものと考えられる。これには調案や試案があり、祭の当日は主上出御のもと清凉殿で舞案があり、ついで岩清水八幡宮に赴き、社頭で舞が奉納される。為時の詩と輔尹の歌は、まさにこの舞案の様子を詠んでいるのであろう。

以下、夏・秋の場面が展開し、冬は「野行幸」「仏名」「除夜」等と続く。このうち「野行幸」の機相は『源氏物語』の「行幸巻」に冷泉院の例が記されるが、それによると卯の時（午前六時頃）に内裏を出発し、朱雀大路を南下して五条を西に向かい、狩獵場としての大原野にたどり着く。この行幸には、美美しく装束した親王とか上達部、左右大臣、内大臣、納言以下の人々などと残らず供奉し、またその行列を見ようと、桂川のアたり

まで物見車が隙なく立て並べられたと記す。このように野行幸というのは鷹狩を指しており、『河海抄』によると「付鳥校事」として獲物の雉は雌雄一双を木の枝に付ける作法があったという。さて、13の下句に「はるけくみゆるしめの内かな」とするのは、藤原氏の氏神である春日明神を勧請した大原野神社を指していると思われ、鷹狩をする野のかなたに描かれていたのであろう。また、10輔尹の歌に詠まれた「ましろのたか」は羽毛の白井鷹の意で、これは名鷹との誉れが高く、『白鷹記』（類従）によると、「天智天皇の磐手野守。延喜聖主の白兄鷹。一条院の鳩屋赤目みさこはら。小一条院の藤花韓巻藤沢山城等也」と、これらはとりわけよく知られていた。『大鏡』（巻二）にも、六条式部卿（敦実）が催した野行幸での「しらせう」という白鷹の話が記されるが、この屏風でも白くかがやく鷹の姿が認められたに違いない。憶測すると、この場面は一般的な狩獵を描いたのではなく、頼通も供奉したことで知られる野行幸をモデルとしていたとも想定できそうである。

これまで頼通大卿屏風を詠んだと思われる和歌や漢詩を収集し、その内容について描かれた屏風絵を想定しながら歌を分析してきた。現存の資料から判断すると、月次による四季図屏風であったこと、それぞれの場面に對して和歌と漢詩が詠まれていたこと、さらに必ずしも一人一首ではなかったことなどが知られる。それにたまたま祝儀用の屏風に「大鑿」図が示されたというのではなく、このテーマによる屏風絵の例があまり知ら

れないように、製作者（道長か）は頼通の大業を意図し、彼自身の姿までも各所の場面に描き込ませたのではないかという思いもする。絵を見る参加者たちは、月々の行事を追いながらそこに頼通の栄花の記録を見る、そのような意義を屏風は持っているに違いない。さらに、ここに集められた輔尹の歌だけでも九首、輔親は八首となり、各人がこのように詠作していったとなるとかなりの歌数にのぼり、「和歌八十首」どころではなくなる。四枚目の古筆断簡で、「輔親 式部並不献」とあるのは、「並」とするように広業だけではなく、和歌においても輔親は詠んでいながらもその場には提出しなかったというのであろう。すると、「不献」とされた歌も含めると、この大業料の屏風歌用として作られていた歌は、まだはるかに多くなってくるはずである。

注

- (1) 本文は、松村博司編『栄花物語の研究 校異篇』（昭和六〇年刊、風間書房）により、私に漢字等を付した。
- (2) 屏風を直接見て詠作するほかに、このように絵の内容に関する資料（和歌題と略画）が与えられて詠むこともあった。拙稿「影子里内料屏風絵と和歌」（『和歌史の構想』所収、一九九〇年刊、和泉書院）
- (3) この折の作品については、すでに杉谷寿郎氏「屏風詩歌 切をめぐって」（『和歌史研究会会報』第70号、昭和五四

年五月）、後藤昭雄氏「寛仁二年藤原頼通大業屏風詩について」（『語文』第四五輯、昭和六〇年四月）、同「佚存平安朝詩注」（『語文研究』第五六・六七号、平成元年六月）がある。杉谷氏は和歌を、後藤氏は漢詩を中心にしながら、成立の背景、屏風絵の内容についても詳細に考察され、多くの御学恩を蒙った。拙論ではそれらの資料を集成する意図もあるため、すでに明らかにされた資料も多く重複もするが、御寛容願いたい。

(4) 古筆断簡一首の「石清水臨時祭」除夜の他に、後藤氏は資料を博搜され、「子日」「卯杖」「三月三日」「曲水宴」「卯花」「閉牆」「行客聞郭公」「乞巧奠」「掘前裁」「仏名」の題の漢詩を集められている。ただ、古筆切の為時の詩を「賀茂臨時祭」とされるが、同題として配列される輔尹詠が『万代和歌集』によって「石清水臨時祭」の作と知られるので、ここではそのように処理した。

- (5) 『上代倭絵年表 改訂版』（昭和四一年刊、墨水書房）
- (6) 年中行事等については池田亀鑑著『平安時代の文学と生活』（昭和五三年刊、至文堂）、山中裕著『平安期の年中行事』（昭和四十七年刊、塙書房）等による。
- (7) 私家集の本文は、『私家集大成』（明治書院）による。
- (8) 片桐洋一著『歌枕歌ことば辞典』（昭和五八年刊、角川書店）

（いい・はるき 本学文学部助教授）